

# 土佐光信考 下

——土佐派研究の一節——

## 谷 信 一

### 五、遺 存 品

光信の傳記と文獻上の作品とは以上の如くであるが、更にその眞筆と思はれる遺蹟に就て製作年代順に一瞥を加へて、本稿を終る。

遺品の中で確實なものとして最初に位するのは内藤政光氏所藏の星光寺緣起繪卷二卷である。本卷は東京帝室博物館の昭和十年十月開催名作屏風繪卷特別展覽會に出陳されて一般に紹介され、更に大日本史料にも<sup>註八十九</sup>著錄されるに至つてゐるが、既に古く、考古畫譜に「舉母内藤家藏」とあり、土佐系圖にも「刑部少輔光信、星光寺緣起二卷、詞書二樂軒」とあるもので、畫は光信、詞は飛鳥井雅康<sup>永正六年十月廿六日歿</sup>といふ傳稱があつた。しかしそれより以前に、實隆公記や十輪院内府記にも星光寺緣起繪卷の製作の事實を傳へ、それによると、文明十八年八月廿四日以前に光信の繪が出来上つてゐて、姉小路基綱や中院通秀が詞を書き、更に實隆が染筆して、翌文明十九年<sup>長亨元年</sup>二月廿九日には完成してゐることが知られる。<sup>註九十</sup>

遺存の内藤家本は兩卷詞繪共に八段あつて、詞の内容上では一段の缺脱もなく揃つてゐるやうであり、卷末には光起の光信筆なる極書があるが、問題は、これと實隆本とが同一品であるかどうかといふことである。書に就て専門外の私は、内藤家本の詞書の間に基綱、通秀、實隆の三筆を區別することは出来ないけれども、その中に實隆的書體があることは否み難い。殊に最初の部分を例に取つてみれば、この文明十九年の當時は、實隆卅六歳であるからして、これを以て實隆の壯年時の書體として許せないことはないし、殊に後に説くが如くに、實隆廿五歳の書と思はれる石山寺緣起繪卷第四卷の詞書と比較するならば全く同一手法のものともてよい。その故に、星光寺繪の詞には實隆の書があることを認め、その結果として、これが實隆公記に錄するものと同一本であると考へ得る。

その畫圖の方を光信筆か否かといふ立場で眺めてみたい。元來、この繪卷は、その様式が室町中期のもの即ち光信在世期のものであることは衆目の一致するところであり、星光寺の靈驗譚の緣起を扱つたもので、當時の地藏信仰に伴つて六地藏の一として著名な本寺を取材にしたとい

ふ製作背景はよく諒解されるところである。けれども、光信眞筆の北野天神縁起繪卷や清水寺縁起繪卷に較べて、同筆なることが確認され得るかといふことが問題であるが、そのことは、詞に於る實隆の場合と相似た條件があるのではないかと思ふ。即ち様式上では

これらとは別のものであるが、技法上ではやや類似した要素がみられる。例へば星光寺繪の人物描線をみるに、直線的なものは多く一筆で長く描くが、曲線的なものは不連続的で、速度や動きが少なく、鋭どさがなく、いわゆる運筆の巧妙さや妙味が低い描線であつて、概して暢達とは言へない性質のものである。この傾向は後の北野天神繪にも傳つてゐるが、しかし清水寺繪になると、かかる描線技法は次第に解消されてきて、描線の本質たる熟鍊ある自由性の域に到つてゐるのを示してゐる。或は又、星光寺繪にみる岩石の表現と描線をみるに、その特殊な表現法は形式化されたある特定の流派的なもので、これが又、北野天神繪に現はれる僅かな岩石類と聊さか共通し、更に又、石山繪第四卷とは大いに類似してゐるのを認めざるを得ないが、清水寺繪に至ると、それが全く消失して別種なものになつて現はれてきてゐる。

そこで、星光寺と天神繪との間には、技法上の多少の類似があることを實證的に認めた上で、星光寺繪、天神繪、清水寺繪と三者を縦に列べ

て考へて、そこに光信筆なることを立證し得る理論的條件がないであらうか。それには、やはり時間上の條件、星光寺繪から天神繪まで十七年、天神繪から清水寺繪までが十四年といふ距離があることを重視しなければならぬと思ふ。誰がみても、星光寺繪と清水寺繪とは同筆とは認め難いであらうが、その原因は、その間に卅一年の距たりがあるといふことと、後述の如くに夫々に特殊な出来榮えをもつた作品であるといふこととによるのではなからうか。故により年代間隔の少ない、且又、平凡な出来である天神繪と較べると、多少の共通部分があるといふのも、そのためではなからうか。かう言ひ得る背後には、否、星光寺繪そのものの光信筆なることの條件として、次の事情をも大いに考慮する必要があり、且又、それだけでも以て光信筆と決めてよい性質のものであらう。即ち、現存の星光寺繪と同一時代に光信と同一繪卷を描き、且又、實隆が詞を書いてゐる。同じ時代に別人が同じ繪卷を描き書くことはあり得るが、それは類例稀なることと、且又、その文獻上の證明が得られてゐないといふこと。このことだけでも、内藤家本を以て光信本と認める有力な條件となり得るのである。もちろん、斷はるまでもなく本巻が摸本的なものであるかどうかの疑問を挿簞む餘地は全くないのである。

星光寺縁起繪卷 上卷第六段 京子 藤政氏藏

因は、その間に卅一年の距たりがあるといふことと、後述の如くに夫々に特殊な出来榮えをもつた作品であるといふこととによるのではなからうか。故により年代間隔の少ない、且又、平凡な出来である天神繪と較べると、多少の共通部分があるといふのも、そのためではなからうか。かう言ひ得る背後には、否、星光寺繪そのものの光信筆なることの條件として、次の事情をも大いに考慮する必要があり、且又、それだけでも以て光信筆と決めてよい性質のものであらう。即ち、現存の星光寺繪と同一時代に光信と同一繪卷を描き、且又、實隆が詞を書いてゐる。同じ時代に別人が同じ繪卷を描き書くことはあり得るが、それは類例稀なることと、且又、その文獻上の證明が得られてゐないといふこと。このことだけでも、内藤家本を以て光信本と認める有力な條件となり得るのである。もちろん、斷はるまでもなく本巻が摸本的なものであるかどうかの疑問を挿簞む餘地は全くないのである。

右の如く、様式上では全く異なるものであるが、技法上では多少の共通点があることを實證上の唯一の根據とし、その背後には年代上の著るしい間隔といふことを前提にして、星光寺繪を以て、光信の若描き——恐らく當時は四十歳代であらうから、それを以て若描きとは言へないが、中年期の最初の作と認めたいと思ふ。

それと共に、前に星光寺繪と清水寺繪とは、特殊性があると言つたことに就て、少しく説明しておかねばならぬ。而してそのことは、本繪卷の價値を云々することと一致してゐる。

星光寺繪の詞の筋は、正應二年に於る佛師の靈驗譚で終つてゐるので、その詞の選述も相近い頃のものともみなしてよく、随つて光信の時代以前に星光寺緣起繪卷は既に行はれてゐたと考へられるが、星光寺そのものは、同寺所藏の原本的なものが残り得ないと想像される程に、屢々祝融に見舞はれてゐる。それにしても、光信が他の類品に基づいて描くといふことは想像され得る。しかしながら、その畫圖をみるに、繪卷の詞の説明圖といふ建前で觀察するといふと、圖樣が詞に即しすぎてゐる。詞の内容を直接に現はしすぎて環境描寫的な餘裕が少ない。而して各段に前後の連關が稀薄で分離的な傾向をもち、構圖性といふことに單純である。随つて創作としては、卒直ではあるが、單調であるといふ缺點をもつてゐるものである。ところが、鎌倉時代繪卷に現はれた詞と繪との關係は、詞の説明圖としては、もつと暗示的であり、空想的であり、いはゆる藝術的であるのが通則である。故に、星光寺繪の畫圖は、鎌倉時代的表現といふよりも、むしろ室町時代的なものであると言へる。かくして要するに、本卷を以て光信自身の創作ではないかといふ結論にもつて

ゆく理由となしたのである。次に又、人物を初め、家屋、調度の類の描寫をみるに、風俗的には室町時代の要素が著るしく濃厚であつて、鎌倉時代的なものが殆んどないといふことも、この説を大いに援護するものである。翻つて天神繪や清水寺繪に於てはかかる性質が少ないといふのは、要するに鎌倉時代の標範となるべき先行本があつた、即ち光信の純創案によらなくてもよかつたがためではなからうかと考へられる。而してその上に、天神繪は暫らく別とするも、清水寺繪は後述の如くに、特に出來のよい成功したる作品であるからして、そこで、星光寺繪と天神繪、さては清水寺繪との間に、餘りにも開きが出來てしまつたのではないか、私は解釋する次第である。

以上の言葉は、星光寺繪の價値を低く見るやうに受取られる嫌ひがあるかも知れないが、それは繪卷物盛期の鎌倉時代作品に較べての上の話であつて、室町時代繪卷の系列に置くなれば、やはり第一流の作品たることは言ふまでもない。上は融通念佛緣起繪卷や山王靈驗記繪卷から、下つては一遍上人繪傳や眞如堂緣起繪卷に至る間に伍して鑑賞するに、様式的にも技法上でも決して劣るものではない。のみならず、鎌倉時代繪卷の摸本的製作と思はれる形式化して生氣を缺く種類のものに優ること數段である。さういふ意味で、對象の把握とその表現が素直で直觀的で修飾がないことを以て、形式化した天神緣起繪よりも優れてゐる點とみたい。しかしそれが、表面上のことに終りがちであるのが遺憾であるが、そこに時代として室町、人として光信の限界を求めたく思ふ。なほ本繪卷の一二の特色をあげるならば、前述の如くに詞に即應する忠實な圖樣でありすぎるためか、畫中に人物が餘りに出すぎる。筋の發展と説

明のためには、人物を出すのが最も簡單で便宜であるのは確かであるが、それに頼らないところが、吾々の知る繪卷の成功の秘訣であつた。且又、それを實行し得たのが鎌倉時代であつた。加ふるに人物は何れも夫々に表現をもち、動作をなし、常に何等かの姿態であるといふことを説明的に強調する傾向がある。しかしこれは、單に畫圖として眺め、詞の説明として味讀するには、却つて効果があり面白く眺められるもので、かかる手法の生れるのも、ひとへに時代の故ではないかと思はれるが、この傾向は天神繪にも否定されないものである。なほ天神繪ほどには形式化してゐない變則な霞の使用は、畫面効果の上に著るしく缺點となつてゐるのも見逃せない。要するに本卷を部分的に觀察すると、描線、色彩、或は人物描法、添景物畫法、何れも室町中期の特色であり、流派としては土佐家の技法そのものであつて、本卷の作者を光信と假定する他に、暫らく人を得ないのではなからうかと思ふ。

なほこれに關聯して併せ考へられるのは、石山寺緣起繪卷七卷の中の第四卷である。この石山繪の最初は鎌倉時代末から吉野時代に互つての製作であるが、石山寺年代記録以後の文獻は第四卷と第五卷とを以て光

光信筆 十五圖 裏貼紙墨書銘

京都 淨福寺藏

信の製作とみなしてゐるものが多い。そこでこれを見るに、第四卷のみは少くとも光信的畫體のものである。光信的といふよりは、星光寺繪に近似してをり、特に岩石や樹木の形式は全く同一であると言つても過言ではない。岩石などの輪廓線の形式化した無意味な線や、或は點苔の如きは全く共通してゐる。随つてその點のみの技法の一致から言へば、星光寺繪と同一筆者即ち光信と言はねばならぬけれども、その構圖や或は人物描法に於ては、不幸にも合致しないのみならず、全くの異筆と言ふ方に近いやうである。即ち石山寺繪の人物の描線の暢達さは、どうしても星光寺繪と關係をもたすことが出来ないのである。一口で言へば、石山寺繪の方が遙かに上手であるといふべきである。

註九十二

しかしこの第四卷の詞書は、岩橋小彌太氏によれば、實際の筆蹟であることが確認され、私も亦、その上に星光寺繪の詞と同筆を認めるのであるから、その實際であることには疑問がないと思はれる。加ふるに、

註九十三

本卷は星光寺繪よりも十一年以前の文明八年二月前後に書いたのではないかといふ推定も可能であるからして、さうすれば、その頃に光信が繪を描いても差支へない許りか、大いに有り得ることである。しかし前述の如くに、人物描線に本質的な差異を認める以上は、光信となすことは

不可能であつて、私の鑑別としては、むしろ廣周に歸する方が妥當ではないかと思ふ。さうすれば、人物描寫の巧妙さも理解出来るし、岩石などの光信と全く同一であるのも、同じ土佐家の法式であるからであるとして諒解出来るからである。石山寺繪卷に就ては、改めて綜合的に



説く機會に俟つことにして、とにかくその第四卷を以て廣周筆説を立てて、光信の參考に資する次第である。

次に實隆公記の延徳元年九月十八日の條に、

十王新圖像

土佐將監筆、二七日  
本尊也、昨日被下之 銘書進上之

とあることによつて、この年に十王圖を描いたことが知られる。而してそれに相當するものは、本誌に掲載する京都市淨福寺<sup>註九十四</sup>に傳存する十幅圖である。それには、

延徳元年<sup>巳</sup>十二月廿三日蒙 詔命奉開眼供養訖 爲御逆修被圖寫之

沙門善空謹誌 畫工左近將監藤原光信

といふ裏書があるので、これが善空の自筆か否かの問題を別とするも、

光信眞筆とすべき條件が揃つてゐる。ところが、第八幅<sup>註九十五</sup>平等王から第十

幅五道轉輪土に至る三幅には「延徳二年<sup>庚戌</sup>五月十四日、蒙 詔命奉開眼

供養訖」云々とあるからして、延徳元年から翌二年に亘つた二種の銘記

に就ての解釋は、供養の年月日と解すべきであつて、光信の十王圖その

ものの製作は、やはり實隆の記すが如くに延徳元年九月十八日以前とみ

てよいであらう。而して、それから三箇月後の十二月廿三日には少くとも

第一幅秦廣王から第七幅秦山王に至る七幅が開眼供養されて御逆修に

用ひられたのである。さてこの御逆修日の十二月廿三日と言へば、前項

で述べた如くに 後土御門天皇御影の供養日であるからして、恐らくこ

の十王圖はそのための用であつたのではなからうか。なほ蓋裏書によれば、

宮中御用がすんでから、享祿三年に 後奈良帝から御宸筆と共に本

寺に下賜されたものであることが知られ、由緒深き作品である。

その圖様は、恐らく古十王圖を摸寫したのであらうけれども、風俗的には室町特有の性質を混え、或は唐繪的要素を攝取したりして、光信獨自の創作を加えてゐる。随つてその描線、彩色などの技法は光信佛畫の或は土佐派佛畫の典型となるものである。それに就て言ふべきことと多々あるが、ただ名作たることのみを記して江湖の賞鑑を乞ふことにする。なほここにみる裏書を確信するならば、延徳二年五月十四日には、なほ「畫工左近將監」とあるから、この月には同官にあつた。しかし光信は同年閏八月には刑部少輔であることが土佐文書によつて判るからして、その敘任はその間であつたと言ひ得る。而して、その昇格の理由は、前記の御影や、本圖などを描いた功によるのではないかといふことも憶測してよいであらう。

次に泉涌寺内の雲龍院に安置されてゐる 後圓融院御影がある。本圖<sup>註九十六</sup>

に就ても實隆が委しく記録してゐるので、その製作の終始を知ることが

出来るし、又、大日本史料はその照相を掲げ、且、岩橋小彌太氏の精細

な論考があつて、今更ここに詳述する用もないやうであるから、その大

略を述べることにする。

後圓融院は明徳四年四月廿六日に崩御遊ばされ、雲龍院に葬らる。そ

の後、延徳四年四月が上皇の百年聖忌に相當するために、御影新圖の議

が起つて、光信をして描かしめられた。直ちに御影殿に納められたのか

どうかは判らぬが、とにかく其後八年を経て、明應八年四月にこの新本

に 後土御門天皇の勅讃を賜つてなつたのが現存する御影である。即ち

雲龍院主善敍は、この年四月十七日に實隆を通じて 勅賛を請ふたので、

賛語を大内記の東坊城和長に選進せしめられ、越えて廿七日に善敍が

御影を持つてきたので、その晩頭に御宸筆を得ることが出来たが、その際に賛語の起字たる「道」の一字を書違ひ遊ばされて改めてゐられる由である。次で、實隆は善叙に代筆して銘と裏書を書いて、同日直ちに雲龍院に返却してゐる。

光信が拜寫してから勅賛を得るまでの期間が長いのは諒解に苦しむところであるが、何れにしても延徳四年四月廿六日の御忌日までに完成してゐたことは明らかである。

光信筆 後圓融院御影

『御湯殿上日記』の同月廿八日の條に、

(雲龍院)  
うんれうゐん、後ゑんゆう院

との、御ゑいしんてうせられて、もちてしこう、御たいめ

んあり、御らんせられて、や

がて返つかはさるゝ、

とある如くに天覽を得てゐるものは、この現存本に相異ない。

さてこの御影は今全く褪色してゐるが赫黄濃色の袍に、薄色文雲立涌の指貫を袴かれて、纒綯縁の上疊に左向に坐せられる烏帽子直衣姿であらせられる。その御容姿の形式的表現法は、かの神護寺の足利義持像——冠直衣姿であるが——に類するもので、御身の縦長の表現法は法觀寺足利義教像に近く、且又、烏帽子を著けられた御龍顔は殊に近接したる手法である。特に見逃してならないのは、袍の衣摺線である。今は十分に味はへないけれどもその筆法の冴えは、義持像などとも系統を異に

し、さればと言つて、前記十王圖ほどに速力抑揚なく、或は文明十一年の益田兼堯像ほどには硬くはない。むしろ南部家宗祇像に近いとでもいふべきか。さてここに光信の謹嚴な眞體的な描線の標範を見得ると言つてもよいであらう。

ここで併せて想起するのは傳光信筆説をもつ東京帝室博物館の桃井直詮像のことである。直詮は文明十二年五月二日に歿したので、その長子

京都雲龍院藏

安義が光信をして像を描かしめ、朝

倉家の菩提寺心月寺<sup>註九十七</sup>二代海闍に請賛したものであるといふが、この説は近世に入つてのものであるから遽かに信じ難いので暫らく問はぬことにして、その畫像をみるに、侍烏帽子をかぶり、松喰鶴に龜の紋様ある薄藍色の素襖を着して、舶載毛氈上に坐する姿である。面貌描寫は至つて精緻で、また素襖の縐紋線は細い黒

線で描いて、その上に素襖と同色の薄藍色の仕上げの線を添えてゐる。これらにみる描線の技法と、前記の後圓融院宸影のそれとを較べると、共に暢達したる技術はもとより、その細密にして一筆に引く運筆法、或は途中で曲る筆路の呼吸の具合の如きは、甚しく近似してゐるやうである。或は面貌の諸部分の筆鋒や、髮際の毛描なども相近いものであることが認められる。後圓融院御影は絹本、直詮像は紙本であるので、見た上では、直詮像の方が運筆上の妙味をより湛えてゐるのを否み難い

が、私はこの直詮像と前記の益田兼堯像とを文明年間前後に於る武家的俗體肖像畫中の二大傑作として推舉するものである。かかる直詮像の史的價值は別とするも、以上の如き意味に於て、直詮像をも光信筆と認定したいと思ふ。延徳元年に作つた 後土御門天皇御壽像が、もし今なほ傳はるとすれば、ここに光信の肖像三作を擧げることが出来るわけである。

後圓融院御影は、もちろん先行像の摸本、或は御影殿にある御木像の模寫とみるのが妥當であらうし、直詮像は光信筆の推定であるからして、光信の肖像畫に於る手腕そのものは直ちに品等し難い。しかし當代肖像畫は何れも四五の形式の中での描寫であるからして、その姿態表現は光信にしても新案創作はしなかつたであらうと思ふ。故に要はその形式の範圍内での個性表現、當代の言葉で言へば相似性の表現の巧拙如何で價值が決る。その觀點から言へば、後圓融院御影の如きも、神彩奕々たるものには相異ないが、その價值は義教像と大略同列であつて、兼堯像、直詮像には聊さか遜色があるのを認めざるを得ない。けれども、それで以て、直ちに光信の價值を位置づけることが出来ないことはいふまでもない。なほこの光信肖像畫論は、當時の無數の頂相及び武將像併びに公家像との間に置いて、別に論及すべき課題であるから後に譲るが、それにしても、星光寺繪から北野天神繪への十數年間の間を繼ぐ作品として本圖があることは、光信畫研究上甚だ好都合であると言はねばならぬ。

次にあぐべきものは、文龜三年に完成したる北野神社の天神緣起繪卷

三卷である。これは實隆が詞を書いてゐるので、その日乘に屢々記録されてゐて、製作過程が判明する。

その製作及び勸進の議が何時定つたかは不明であるが、既に文龜元年八月廿六日には、實隆が詞を書くことを承諾してゐるので、それ以前であることはいふまでもない。且又、その翌九月十八日には、光信の手許に於ても墨書が大抵出來上つてゐることが知られるので、餘程以前から計畫してゐたのであらう。それから丁度一年後の二年九月十四日に詞の中書がすみ、更に五箇月後の翌三年二月十四日に、愈々實隆は上卷の詞の立筆を行つてゐる。故に光信としては、墨書が終つた元年九月十八日から翌々三年二月十四日の詞立筆に至るまでの一年半の間に於て、畫圖を完成したものと言へる。さて實隆は十四日に詞を書き始めて、十七日で上中兩卷を終り、同日下卷に移つて翌十八日で、即ち前後五日間で終功してゐて、翌十九日に校合をしてゐる。この速度からみると、繪卷の詞書は案外に早く出來上るものであつて興味が深い。翌月の三月廿三日になつて、繪を一段増補することになり、廿四日にその詞書の清書なり、ここに全く繪と詞とが完成した。次で四月廿日に實隆を経て 後柏原天皇の御宸筆を賜ふことになつて、それは御嘉納あつたことと思ふ。更に翌五月十二日に實隆が奥書を書いて、而して現存する天神緣起繪卷として完成したのである。

さてこの天神緣起繪卷は、文龜三年五月十二日の奥書を書き終つた時に、すべての功が終つたものと吾々は考へられるが、しかるに、その奥書は「文龜癸亥曆二月十八日記之」とあつて、二箇月を逆上つてゐる。これにはどういふ理由があるのか知らないが、實隆が詞を書き終つた日

が同じくこの十八日であるので、或はそれに因んだのであらうか。さうすれば、繪卷の完成日は詞の書寫日を以て定めるといふ習慣の一つの例であつて、後の附加的な時間は完成の形式に加算しない場合もあるといふことを知るのである。

この光信の天神緣起繪卷は、第一卷の奥書にもある如くに、「舊本紛失<sup>註九十九</sup>」のために新寫されたのであつて、その舊本とは承久本たる八卷のいはゆる根本緣起のことである。随つて、この場合に參考となるものは根本緣起そのものであり得ないから、光信は何本を以て標本としたのであらうか。普通に天神緣起繪卷として著名なのは、いはゆる弘安本たる弘安六年作の北野神社の二卷本と、應長元年の松崎神社の松崎天神緣起六卷と、元應元年の奥書ある前田侯爵家のいはゆる荏柄天神緣起三卷とである。圖樣の上でこれらと光信本とを比較すると、何れも多少の類似があるけれども、その類似の程度は、前田本よりも松崎本、松崎本よりも弘安本といふやうに接近してゐて、要するに三者の中では弘安本に最も近いと言へる。しかしながら、弘安本は今こそ二卷で、その連本が他に一卷考へられるにしても、當初に於ては三卷で完結したものではないので、もし光信がこれに基づくとすれば、三卷本として適度の壓縮をなしたのであらう。それも一つの想像にすぎないのであつて、更に又、三卷で完結したものが他にも既に描かれてゐて、例へば正嘉二年に藍觴する安樂寺本の如き、或は應永廿六年の杉谷神社本や文安三年の佐太神社本の如きは、それであると考へられる。慶長十四年の道明寺本、或は寛延三年の光起筆の北野神社本にしても共に三卷本である、故に三卷形式は光信以前から、而してそれ以後も續いて行はれてゐるのであるからして、

光信のこの場合に於ても、參考とする多くのものが既存したのである。しかし、直摸といふことは殆んど行はれてゐないからして、圖樣的類似といふ點のみからいふと、弘安本に基いて製作したとみるのも一つの方法のやうである。

圖樣的根本が摹古作であるがために、この繪卷に光信の創作能力の規準を求めることは不可能であつて、これより廿年以前の作なる星光寺緣起繪卷の方が幼稚であるだけに、却つてそこに光信の創作性を求めたい逆心理が起る次第である。しかし部分的な畫法を單獨に摘出して眺めるならば、確かに星光寺緣起よりも進歩してゐるし、すきがなくなり、最も着實なものと言ふべきであらう。人物其他の描線などは、後圓融院御影ほどには鋭くないが、星光寺緣起にも一寸みられる伸縮性をもつた性質のものが主となつてをり、この描線は清水寺緣起に於て完成してゐるところの光信の繪卷物に於る線描の特質である。また作圖上の添景物に無用なものが減じ、或は夫々の物體の象形にも無駄が少ないのは、やはり先在する繪卷によりて自ら洗鍊と陶汰とを得たる結果であつて、それを以て直ちに光信その人の畫才とはなし難い。それは、後の清水寺緣起に於てすら、いはゆる意味のないものが往々にして認められるからである。

星光寺緣起と天神緣起との兩繪卷に次であぐべきは、永正十四年製作の東京帝室博物館の清水寺緣起繪卷である。幸にも本繪卷に就ても、當時の諸家の日録<sup>註百</sup>が記載してゐる。それによると同年四月十九日以前に繪は既に出來上つてゐて、恐らくその年の中に詞も諸家によつて書かれ終つたらしい。而して、これは清水寺と關係深き興福寺一乘院の良譽大僧

正の發願によるもので、良譽は 後柏原天皇の御宸筆を願つたところが、同じく諸家が詞を書いてゐる誓願寺緣起繪卷註百一にも染筆遊ばされなかつたとの理由で、この度も却下されてゐる。さてその詞は、三條西實隆と中御門宣胤とが各五段づつ、及び甘露寺元長が書いてゐることが記録によつて知られる。而して奥書にも「右卅三段、大概かくのとし」云々とあるからして、現存の三卷全三十三段は少しも缺脱のないものであることが知られる。しからば、各卷各段の筆者は如何といふに、文獻上では全く判らないので、書體の判斷に俟つより他に方法がない。古筆了伴は上卷は近衛尙通と中御門宣胤、中卷は三條實香と甘露寺元長、下卷は三條西實隆と足利義政と極めてゐる。しかし足利義政はその時既に在世してゐないのであるから、この鑑別は信用し難い。幸にも大日本史料註百二は上卷の前半六段を近衛尙通、後半五段を中御門宣胤、中卷の前半六段を三條實香、後半五段を甘露寺元長、下卷の前半五段を三條西實隆、後半六段と奥書とを良譽と鑑別してゐるからして、私共はこれを信憑すべきであると思ふ。

この清水寺緣起のテキストとなるべき詞は錄倉時代に出來てゐるからして、それに伴つて畫圖も既に行はれ、緣起繪卷は室町時代以前からあつたとみるが至當である。故にこの光信の場合も何かの参考とすべきものが傳つてゐたであらうからして、これも星光寺や天神の兩繪卷と共に、光信の純粹な創作と考へない方に私は與みする。この清水寺緣起の畫圖は、星光寺繪と天神繪とに比較して、一段の圖樣が甚だ長いことに氣附く。しかもそれが構圖的に巧みに連關してゐて中斷や重複が認められない。その構圖法は、恰かも高階隆兼筆の春日權現驗記繪や玄奘三藏繪、

特に後者の圖樣と相似たる要素が認められ、山中描寫に至つては著るしき近似があるやうである。具體的にかく古繪卷を名指すことに難があるとするれば、廣く錄倉時代的な形式と樣式とをもつてゐると言つてもよいであらう。如何に光信が當代第一流の名手であるにしても、彼の純粹な創作としては、かかる構圖効果は描き難いのではないであらうか。その圖樣は、繪卷の盛期たる錄倉時代といふものを前提としてのみ肯定し得るやうな質的な内容であるやうである。それ故に、私はこの光信本にも古繪卷があつたものであらうと想定する。更に一步を譲つて、これが純粹な摸本であるとしても、その畫技は實に優秀であつて、星光寺繪や天神繪、特に前者を過かに凌駕する性質のものであることを認める。むしろ光信の繪卷畫家としての史的價値は、實にこの清水寺繪によつて決定されてゐるものと言へよう。上は應永の融通念佛緣起繪卷から下は光茂の桑實寺緣起繪卷や久國の眞如堂緣起繪卷に至る間の、全室町時代繪卷中での壓卷である許りでなく、錄倉時代繪卷の領域にも迫るものである。斯本なくば——且又かの桃井直詮像の如きを傳光信としても肯定し得ないとすれば——土佐家の中興者としての光信の信望も、實質的には平凡なるものとして高く評價し難いとまで言ひたい。七十年或は八十年に及ぶ光信の全生涯の畫技は、實にこの清水寺繪一本に凝結されてゐると言つても過言ではないであらう。

最後にあぐべきは、嚴島神社の寶物館に置かれてゐる卅六歌仙額である。本圖は嚴島繪馬鑑に收められてゐて、それには「永正十七曆、願主道本、僊歌右筆實隆公、光信圖之」の裏書があることを記してゐる。私

は不覺にもその裏書に氣附かず、且又卅六枚現存するや否やも記憶に留めてゐないのであるが、右の裏書は後人の書入れの文體であるらしいからして、果して信じてよいのかどうか疑問である。若し信ずるとしても、板繪のために、その藝術價值は既に見るべき程度のものではないので、單に史料적價值をもつに止まる。即ち長い光信の生涯は、この翌大永元年に終るのであるからして、本圖こそは遺存品中の絶筆として貴重すべきものとなるかも知れない。

以上、光信の諸方面に亘つて長い敘述に及んだが、光信一生の片鱗でも描き得たとすれば幸ひである。繪卷畫家として、或は大和繪畫家とし

# 土佐光信年表

## 光信事項

## 參考事項

2137	文明九	2126	文正元
		2128	應仁二
		2129	文明元
2136	文明八		
2135	文明七		
2131	文明三		

→ 右近將監任  
繪所預補  
大芋社領相續

六角益繼繪所預補  
廣周國分寺領件  
雪舟歸朝  
實隆十八歲

能阿歿(七五)

小畫下繪作  
石山繪第四卷作  
日野勝光像作  
春浦像作  
廣周國分寺領件

2193 文明十一

← 桃井直詮像作

2140 文明十二  
2412 文明十四  
2144 文明十六

→ 左近將監  
五位敘

2145 文明十七

大芋社領件  
大芋社領件

2146 文明十八

2147 長享元

星光寺繪作

廣周・行定明惠繪作  
益田兼亮像作  
藝阿觀瀑僧圖作  
久信慕歸繪補作  
正信道家像作  
雪江像作  
藝阿歿(五五)  
雪舟山水長卷作  
正信十僧圖作  
廣周金勝寺領件

二〇  
ての光信の史的價值については、以上で以て大略の推定がつくであらうからして、ここに結論めくことを敢てする必要はないであらう。更に又、室町時代も中期をすぎた大和繪畫家の史的價值をば、今さらしく論判することが或は無意味であるのかも知れないからして、これで以て擱筆したいと思ふ。長い一生をば、當時の公武兩階級の美的意欲の忠實な表現者として終始し、それと共に世俗的には光榮ある生涯を全ふし得たといふことを以て結語としたい。  
なほ終りに、光信年表と、本文で使用しなかつた光信關係文獻とを掲げておく。





誓願寺繪作

屏風鑑定

連歌

清水寺繪作

正月幕府出仕

連歌

正月幕府出仕

連歌

阿彌陀・不動作

正月幕府出仕

歌仙額作力

正月幕府出仕

正月元長ト會食

實隆六十七歲

義晴將軍任

光茂父ニ代ル

光茂繪所預補

光茂大芋社領件

久國眞如堂繪作

光信歿ノ通説

中御門宣胤歿

相阿歿

註九十二 「日本繪卷物集成」第十九卷の岩橋氏解説。

註九十三 「實隆公記」文明八年二月三日、晝間參御前、石山寺緣起繪四卷詞讀之、自朔

日勅約之間、今朝令祇候了、及晩退出、

とある言葉をもて、この第四卷の詞の製作と關聯せしめる説が、前記岩橋氏の論説中にあり、有力な傍證となる性質のものである。

註九十四

「箱蓋裏書」

後土御門天皇爲御逆修 詔畫工土佐藤原光信騰

寫之、沙門善空奉 勅所點眼也、享祿三年庚寅之

秋

後奈良帝延當寺二世眞澄上人於 宮中 勅講

彌陀經講了日、

帝手書彌陀六字名號與唯佛與佛乃能究盡八大字

并斯圖以 賜之、自後所珍藏於當寺也

今茲文政

(五年二月) 壬午仲春加脩補寫 見住住淨福寺忍譽音濃謹誌

「襖背裏書」

土佐光信冥府十王之圖、「後奈良帝所賜於當寺二世眞澄上人」人也、圖四緣畫蓮華蔓以象裝

襖「歷年之久絹頗割裂而四緣尤甚、今」悉裁去之、乃易以綺綾更加修補、以「謀不朽、

庶幾斯正圖永世不泯滅、」

文政五年壬午仲春、淨福寺十六世忍譽音濃

右の表裝裏書を信すれば、もとは描表装で、同じく光信が描いたのであらう。實隆が書

いた銘も、その表装中にあつたので、今は無くなつてゐるものと解釋したい。

註九十五 第八幅の貼付墨書銘には「延應元年巳十二月廿三日」云々あつて、それを消し

て上に、二年戊戌五月十四日」と訂してゐる。これに就ては差當り適當な解釋をもたない。

註九十六 後圓融院御影は「大日本史料」七之一に收載されてゐる。而して本圖は岩橋小

彌太氏によつて紹介されたもので、論説は「佛教美術」第十六號に發表されてゐるので、

註八十九 「大日本史料」第八編之十九、

註九十 「十輪院内府記」文明十八年八月廿四日、自基綱卿許、送星光寺ヤキ緣起、

〔實隆公記〕文明十九年正月廿七日、○上星光寺號屋根緣起繪詞、依一儀、仰中書御沙汰

進之了、秘藏、

註九十一 「實隆公記」文明十九年二月廿九日○上及晩星光寺緣起繪畫圖今日到來云々土佐將監

所書進詞二段、依料紙汚、可書改之由被仰下、則染筆返上了、

茲に新しく附加すべきものは殆んどないが、證明の都合上、左に『實隆公記』の記事を掲出して置く。

明應八年四月廿日<sup>略上</sup> 和長朝臣來、後圓融院御影先年被新圖、安置雲龍院、彼贊可被勅筆之由院主所望之間、去十七日申入之、草進事被仰和長朝臣、予申沙汰者也、件草出現、内々相談之、神妙之由報之、明日可進上之由有命、歸了、

同廿一日<sup>略上</sup> 和長朝臣彼御影贊送之、可奏聞之由返答之、

後圓融院宸影

道光九野

德輕八埏

居蒼生首

同蒼生勞

出列聖端

跨列聖美

國賢鄉老

莫不懷柔

代系年封

而得記錄

於赫太上

觀古如今

午後進上之處、明日番參入之時、猶可被仰談之由勅答<sup>略下</sup>

同廿七日<sup>略上</sup> 雲龍院入來、後圓融院御影被持來之、勅讀事今日申入之委着注左、

後圓融院御影、勅讀塋形、以紙切調之、大概文字寸法等此定可然哉、重而可被仰下之由今朝申入之處、晚頭則被染宸筆被下之、則遣安樂光院<sup>雲龍院、自今朝在京、此院兼帶住持也</sup>了、旨趣令祇候可

申入之由申入了、女房奉書如此、件奉書副遣寺之間寫之、

けさ御ゑまいり候、あそはしやうなとくはしく申され候、よろこひおほしめし候、い

んしゆにもつこもりよりつかはされ候はんするよしおほせられて候へとも、御なかか

きなと御さた候へハ、中／＼つき候て、猶しやうたるなく候ほとに、かたのこと

くあそはしてつかはされ候、御ゑをよこされ候と御めんほくなくおほしめし候、こと

にみちといふもんしあそはしちかへられ候て、むさ／＼とおくにねんかうなとあそは

しくへられ候へきかと申され候へとも、猶もんしおほくなり候とおほしめして、こ

のふんにて候よし、よく申とて候、かしこ、

侍従大納言とのへ

抑依院主所望、件御影銘竝裏書染筆愚筆了、

土佐光信考

裏書銘  
後圓融院宸影 勅賛 雲龍院常住

延徳第四壬子曆、孟夏廿六日、當百年聖忌奉新圖之畫師畫所預光信

明應第八己未四月廿七日賛語<sup>勅賛大内紀菅原和、被染宸筆者也、長朝臣草進云々</sup>

東山雲龍院住持比丘善叙

一昨日御書、昨夕申送候、近比不可說次第候、仍御影上縱横寸法只今先調進申候、聊非

疎略之儀候、御影持參仕可得尊意心中候、此旨可預御披露候、恐々敬白、

四月廿七日

善叙（花押）

中務少輔殿

註九十七 『桃井氏系圖』、由來年譜。なほ本像は『國華』第四八八號に收められてゐて、その解説は私が擔當したので、併せて参照を乞ふ。

註九十八 『實隆公記』文龜元年八月廿六日<sup>略上</sup> 玄清來、波々伯部兵庫申送之旨、北野縁

繪可新調之、詞事可染愚筆歟事也、斟酌雖無極、依事體可書試之由報之、

九月十八日<sup>略上</sup> 畫所預土佐刑部少輔光信來、北野社本地繪先年紛失、今度可新圖、件墨

書大底出現、彼詞事予可令清書由、松梅院先日以波々伯部所望、領狀之間、委細繪事可

相談之由也、當時寫經不得隙之間、靜加披見可報所存之由命了、其次春日縁起繪下書、

<sup>（略）</sup>高兼感神靈之告之事等相語、有興、

十月四日<sup>略上</sup> 土佐刑部少輔來、北野縁起繪事相談之、又愚拙肖像紙形令寫之、十分不似

比興也、

文龜二年九月十四日<sup>略上</sup> 今日北野縁起繪詞中書終功了、

文龜三年二月十四日<sup>略上</sup> 今日北野縁起繪上卷詞立筆、

二月十五日<sup>略上</sup> 北野縁起兩三段又書之、

二月十七日<sup>略上</sup> 早朝行水、繪詞書寫如昨日、中卷終功、下卷始一段書之、

二月十八日<sup>略上</sup> 早朝行水、縁起繪詞終書寫功了、

二月十九日<sup>略上</sup> 縁起繪詞加校合、遣玄清許了、彼法師并宗碩等來、勸一盞、

三月廿三日<sup>略上</sup> 畫所預光信刑部大輔朝臣來、聖厝繪一段可書入之事談之、料紙持參之、得

其意之由報了、

三月廿四日○上 及晩行水、聖唐繪詞一段染筆、則全土左刑部許了、  
三月廿八日○上 波々伯部、兵庫助相行、松梅院來、是先度天神緣起繪詞書寫之禮也、松  
梅院童形、扇杉原携之來、波々伯部献太刀、會所公隆主同來、玄清所相談也、  
四月廿日○上 早朝玄清法師來、聖唐緣起繪詞書事所望、又外題事可申請宸筆云々、委細  
得其意之由報了、仍行水、則加與書、令進上禁裏外題事同申入之、  
與書々様

上卷與如此

聖廟緣起 三卷 依彼社僧之所望

染禿筆畢

文龜癸亥二月十八日

正二位行權大納言兼侍從藤原朝臣實隆

判

繪師

畫所預從四位下行刑部大輔藤原朝臣光信

願主 珠嚴法師

中下兩卷如此

詞 權大納言藤原實隆

繪 刑部大輔光信朝臣

願主 珠嚴法師

四月廿二日○上 玄清來、聖唐緣起繪外題色紙持參之、

五月十二日○上 又北野緣起繪與書事、猶有所望之旨、仍今朝書改之、

聖廟緣起 三卷 繪畫所預從四位下行

刑部大輔藤原朝臣光信圖之、詞正二位行

權大納言兼侍從藤原朝臣實隆依松梅院

梅壽丸命書之、所謂舊本紛失之間、珠嚴

法師相勸懇丹之有緣令施後素之新

樣云々、而今 欲覽之次、恭揮 宸筆

銘于外題、蓋萬代之至要也、應 靈神之  
照鑑者乎、

時文龜癸亥曆二月十八日記之

判

中卷

右詞依松梅院梅壽丸所望染禿筆了

權大納言實隆

繪刑部大輔光信朝臣

願主 珠嚴法師

下卷同之、

右の年號ある與書は現在の上卷にある與書と同一文であるが、行の區切りが多少變つて  
ゐること、花押があることが異つてゐるのみである。

註九十九 慶長四年に發見されて、再び同社に奉納されるまでの長い間紛失してゐたわけ  
で、以て本卷の神寶としての重要さが推定される。

註百〔守光公記〕 永正十四年四月十九日○上 一乘院殿今夕以北小路被仰下云、清水寺緣  
起繪詞被染震筆、可被畏申、至與、攝家各可有助筆之由被申、内々令披露處、今度誓願

寺緣起、陽明以下各被染筆、震翰四條執申、藤先皇異于他御信仰之間、如何様□被染度

雖被思召、一向御事不遊問、清水寺爲同前、可然様爲意得可申云々、則翌朝申此子細、

令返上緣起者也、

〔實隆公記〕 永正十四年四月廿四日○上 甘露寺入來、清水緣起繪詞端五段、今日染筆、

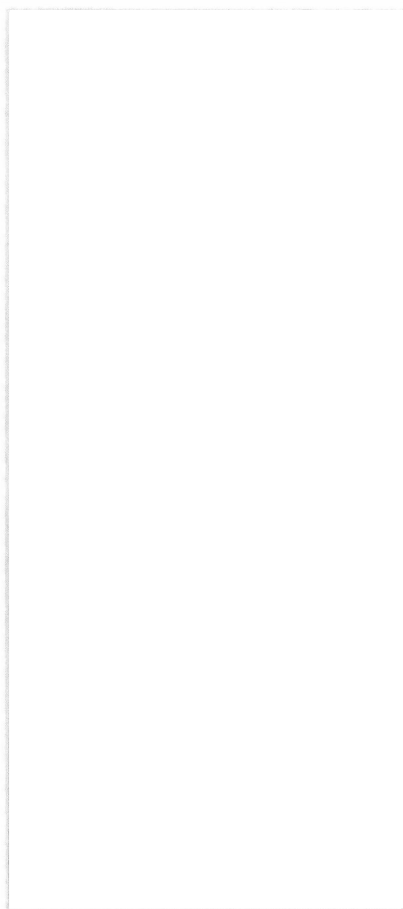
遣甘露寺了、

〔宣胤卿記〕 永正十四年五月廿三日○上 新亞相被來、清水寺緣起繪詞、余請書事懇望、

九月十七日○上 清水寺緣起繪詞、余清書五段分、遣甘露寺相、依彼卿傳達也、繪者土佐

刑部大輔光信朝臣書之云々、

昨日高札時分、祇候御會、入夜拜見申候、繪詞給候、祝著、寺家定可爲快然候、只今所  
用事候て、登山候事候間、不能一二候、恐惶謹言、



藏寺福淨 都京

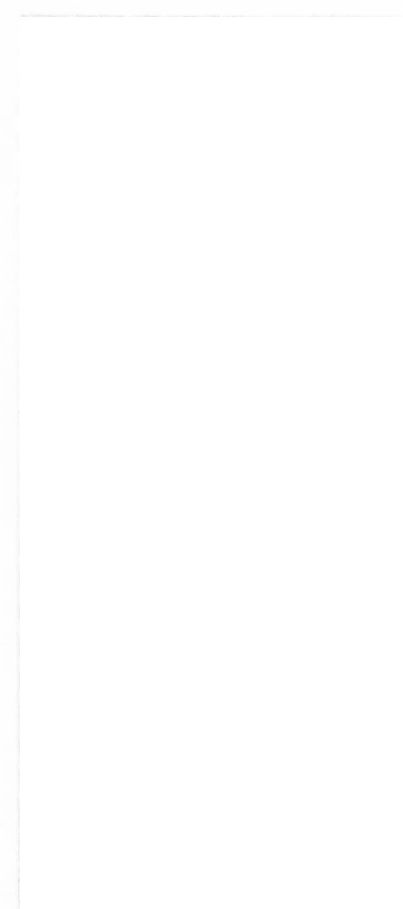
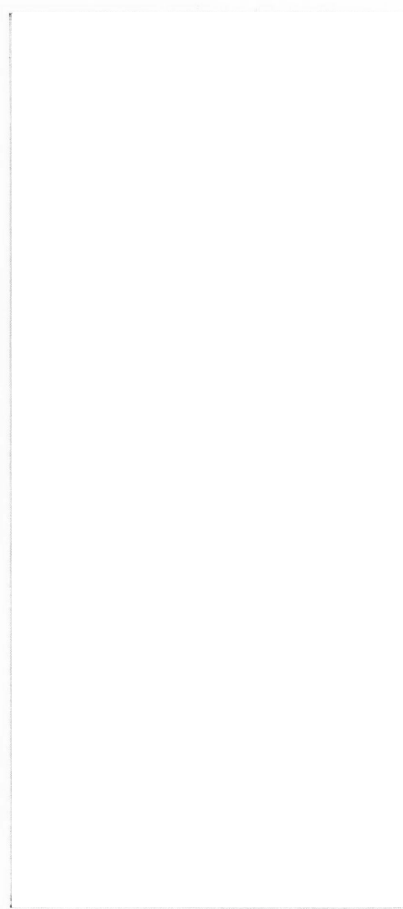


圖 王 十







九月十八日

(元長)  
(花押)

中御門殿

註百一〔宣胤卿記〕 永正十四年二月十二日<sup>○上</sup> 誓願寺緣起繪詞一段書之、

〔元長卿記〕 永正十四年三月一日<sup>○上</sup> 誓願寺緣起詞一段書之、上東門院段也、

この誓願寺緣起繪卷の筆者に就ては、何等記載されてゐないが、或は光信の作ではなからうか。今は傳はらないが、その出現を待望するものである。

註百二〔大日本史料〕 第九篇之六、なほ註百に掲げた清水寺緣起繪卷に關する文獻は、すべて同卷に收められてゐる。

註百三〔續群書類從〕 卷七七二「清水靈驗記」、

註百四 何れ再び調査の折に改めて觸れてみたく、且又差當り識者の御教示を乞ふ。「實隆公」の「公」は「書」、「光信圖之」の「之」は「也」かも知れない。

註百五〔御湯殿上日記〕 明應五年正月廿日<sup>○上</sup> <sup>(土佐判部)</sup>とさのきやう部にもをりかみたふ、一こん御れいにまいらせらるゝ、御たいめんある。

〔實隆公記〕 文明七年正月廿三日<sup>○上</sup> 自御所有召、仍俄著衣冠入夜參内、則參御前、小繪高野雲下畫土佐將監進之可拜見之由也、少々可被書加之處等申入被仰下了、